

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月13日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22614010

研究課題名（和文）ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究

研究課題名（英文）Promoting social inclusion through health care supports for homeless persons

研究代表者

逢坂 隆子（OHSAKA TAKAKO）

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：50028544

研究成果の概要（和文）：1. 聞き取り実施 26 支援団体の活動内容：健康支援、居場所づくり・相談、炊き出し、居住・生活支援、まちづくり、夜回り、労働者の子どもへの支援
2. うち 7 団体が紹介した 15 名（男性生活保護受給者）は、心動かす支援者からの働きかけ（3 名）、居場所やいきがづくり（8 名）、居住・生活支援（4 名）にむすびつき、支援団体・支援者とのかかわりの中で『人として生きるパワー』をとりもどしていた。

研究成果の概要（英文）：1. activities of the 26 organizations interviewed: health care supports, place-making, consultations, daily life supports, town planning, night watch, and supports for children of day laborers 2. 15 cases introduced by 7 organizations (all cases have experiences of acceptance of public assistance) were positively empowered through life changing supports of organizations (3 cases), supports for place-making and finding a reason for living (8 cases), and daily life supports (4 cases).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：地域保健福祉学、社会医学、公衆衛生学

科研費の細目：共生・排除

キーワード：社会的包摂・日雇労働者・生活保護受給者・ホームレス者・健康支援・釜ヶ崎・単身男性高齢者・寄せ場

1. 研究開始当初の背景

(1) 大阪市西成区の釜ヶ崎(寄せ場。‘あいりん’ともいう。0.62 km²)では、日雇労働者の高齢化・深刻な経済不況があいまって、野宿をよぎなくされるものが増え、長引く野宿生活により身体的・精神的疾患をもつ者が多い。最近では高齢・罹患などをきっかけに生活保護を受給してアパート（多くは3畳1間、簡易宿泊所転用）でひとり暮らしをする者が急増している。長年、社会的に排除され続けてき

たために、生活保護受給により金銭的給付をうけても、閉じこもり、うつ状態、アルコール依存をはじめ深刻な問題をかかえながら必要な対応ができず、孤独死・自殺に追い込まれる者も目立つ。釜ヶ崎においては、ホームレス者が利用できる医療機関は限られ、そこで受けた医療に不満を持つ者も多い中で、地域にある無料低額診療施設をはじめとする医療機関・健康支援 NPO など多くの民間支援団体がこのような人々の命を守るため

に活動を続けている。

(2) 逢坂を初め本研究に参加する研究者は、大阪市内、殊に釜ヶ崎におけるホームレス者・日雇労働者・生活保護受給者の健康・生活の実態と支援方策に関する実践的研究を継続中である。国内で初めてホームレス者の死亡実態を調査し、「大阪市内において、毎年多くのホームレス者が命を維持するに足る最低限の食や住さえ保障されない中で、餓死・栄養失調死・凍死・自殺など総じて予防可能な死因によりきわめて若い年齢（死亡者の平均年齢 56.2 歳）で死亡している」ことを明らかにした。さらに死には至らない者も長引く野宿が健康破綻をまねき、重症高血圧症・糖尿病・貧血などの健康異常だけでなく、結核にかかる者も多発していることを実証し、地域の結核対策強化に寄与している。

(3) 研究に関わった者が中心となって NPO HEALTH SUPPORT OSAKA（略して HESO）を設立（逢坂および研究分担者高島毛、連携研究者黒田は常任理事）、釜ヶ崎を拠点に実践的研究・健康支援を続けている。

(4) このような実践的研究を継続する中で、ホームレス者が自分の健康に気を配れるようになったのみならず、人間回復ともいえる姿を見せてくれるようになりつつある。たとえば、我われの研究の一環として、大阪市高齢者特別清掃事業（通称特掃・ホームレス者対象の公的就労事業）従事者の健康診査・聞き取り調査を実施後、自動血圧計購入・ボランティアによる健康相談継続の結果、2 年目以降は自動血圧計利用者が増加・アルコール問題を引き起こす者が減少・高血圧要医療者の降圧剤服用率が増加し、平均血圧値が有意に改善した。さらに、研究開始前は特掃従事中に毎年死亡者がでていたがゼロになった。また、研究事業で結核が発見されたホームレス者が、当初は「死にたい。ほっといてくれ。」と頑固に治療開始を拒否していたが、研究者やボランティアとのかかわりの中で、結核を完治させただけでなく、その後生活保護を受給しながら NPO HESO のスタッフとして活躍するまでになっている。

2. 研究の目的

以上のような実践的研究・健康支援の継続を基盤として、さらに発展させて、疾病罹患を単に医療機関受診に終わらせずに、これを契機とした支援団体・人・社会資源とのかかわりを通じて、長年排除され続けてきたホームレス者・野宿経験者が『人として生きるパワー』『社会とのつながり』をとりもどし、社会的包摂につながる可能性を実証したい。

3. 研究の方法

(1) 一次調査として、釜ヶ崎地域内で活動する民間支援団体から聞き取り調査を実施

する。聞き取り内容は以下のとおりである。
①活動の理念、②活動の対象、③活動内容、④活動従事者、⑤健康づくり、健康や命を守ることにのつながり、⑥仲間づくり、⑦支援により『人として生きるパワー』『社会とのつながり』をとりもどした事例（どのようなかわりをしてどのように被支援者が変容したかを支援者の立場から具体的に聞く）、⑧うまくいかなかった事例（どの支援団体もアルコール依存・ギャンブル依存・精神的問題・借金問題をかかえる人などをあげたが、どこにいつてしまったか不明のために紹介不能）

(2) 二次調査として、支援団体から紹介していただいた事例にインタビュー面接をして聞き取り調査を実施する。聞き取り内容は以下のとおりである。①家族背景、②生育歴、③生活歴、④支援内容、⑤『人として生きるパワー』『社会とのつながり』をとりもどした経過、⑥現在の生活・健康状況など

(3) 聞き取った内容について量的・質的分析を加える。

(4) 倫理的配慮について：調査実施にあたっては、日本社会福祉学会倫理規定および疫学倫理規定にのっとり実施した。また、研究実施前に、四天王寺大学倫理審査委員会に審査を申請し、許可を得ている。聞き取りに際しては、事前に研究の趣旨を文書と口頭で説明し、承諾を得た。さらに事例の報告にあたっては、個人が特定できないように匿名化をはかった。

4. 研究成果

(1) 支援団体の聞き取り結果

26 支援団体からの聞き取り調査を実施した。主な活動内容の内訳（重複回答）：医療・看護・健康支援（4 団体）、就労支援（3 団体）、居場所づくり・相談（3 団体）、アルコール・薬物依存症者支援（2 団体）、炊き出し（2 団体）、居住支援・生活支援（5 団体）、生きがいと居場所づくり（3 団体）、まちづくり（1 団体）、夜回り（2 団体）、労働者の子どもへの支援（3 団体）（詳細は『は一とふる』『は一とふるⅡ』参照）

(2) そのうち 7 支援団体から紹介していただいた 15 事例にインタビュー面接を実施し、聞き取り調査を行なった。

① 15 名の属性：全て男性。年齢（平均 66 歳、最小値 44 歳、最大値 91 歳）釜ヶ崎在住年数（平均 32 年）、生活保護受給年齢（平均 61 歳）、最終学歴（小学校中退 1、尋常高等小学校卒 4、中学校卒 5、高等学校卒 2、定時制高校卒 1、定時制高校中退 1、大学卒 1）、配偶関係（未婚 8、離婚 7）、子ども（いる 6、いない 9）

② 事例を紹介した 7 支援団体の活動内容および紹介していただいた 15 名（全て単身男

性)の概要(詳細は『はーとふる』『はーとふるⅡ』参照)

1) サポーターハウス陽だまり

活動内容:簡易宿泊所転用サポート付アパート。相談員をおいて入居者が必要な生活支援(配食手配、服薬管理・金銭管理など)をする。入居者の多くは元日雇・野宿経験を有する単身男性生活保護受給者で、日常的に支援が必要な者が紹介されてくる。

→紹介していただいた4名の概要

(i)80代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」野宿なし。養護施設からの紹介。西成に来てから生活保護を受給。内科・整形外科他受診中。金銭の管理ができず、部屋代滞納をくりかえす。ギャンブル依存症。「主な支援内容」金銭管理・受診介助・服薬管理。

(ii)70代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」離婚・子どもあり。野宿なし。飲酒のために入院した病院からの紹介。アルコール依存症・認知症・肝疾患。「主な支援内容」受診介助・服薬管理・金銭管理。

(iii)50代男。「野宿・生活保護受給に至った理由」知的障害。夜間高校に通いつつ7年半繊維工場で働くも、『あれこれ言われる』のがいやで退職後、就労なし。30歳頃統合失調症発病。障害年金と生活保護が収入源。野宿経験あり。平成14年、釜ヶ崎内救護施設入所。平成16年施設からの紹介で陽だまりに入居。「主な支援内容」金銭管理・受診と服薬の支援。

(iv)70代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」離婚・子どもあり。パーキンソン氏病・認知症・ギャンブル依存・アルコール依存。野宿経験あり。入院先の病院から地域包括支援センターを経て入居。「主な支援内容」金銭管理。

【考察】知的障害・認知症・金銭管理の困難さ(飲酒・賭け事)など、自力での生活を維持していくのが困難な場合でも、必要に応じたサポートが提供されることで、地域で暮らしていくことが可能となっている。ただ、アパートオーナー側の無償のボランティアとなっている。生活保護CW等公的支援が必要。

2) 今池平和寮

活動内容:救護施設(定員60名)。2000年度からは、退所後の自立支援も開始。施設での生活が、精神的安定を生み出すよう、文化的、創造的、自主的な環境づくりをすすめている。

→紹介していただいた2名の概要

(i)40代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」アルコール依存・不眠・糖尿病で入院。退院時に『アパートに戻るまでワンクッションおいて生活を立て直す』ということから入寮。野宿なし。3ヶ月入寮後主治医の指示で、アパ

ートへ(3年目)。週1回精神科通院中。「主な支援内容」服薬管理・食事管理。平和寮に通ってきて、朝・昼の食事の後に服薬。

(ii)60代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」中卒後、粉塵の多い環境で働き、小児期からのぜんそくが悪化し失業。郷里の救護施設に入ったが、高齢者ばかりなので、本人の希望で平和寮に入寮。2年後近くのアパートに移る。「主な支援内容」平和寮に通所し食事と服薬、レクリエーションに参加。

【考察】入寮のみならず、アパートで独立した生活を送るようになってからも金銭管理・服薬確認・通院確認・相談対応など、細く長く家族のようなつながりが続くことで、知的障害や依存症があっても安心して生活していくことができている。寮に通ってくることの安心感や安らぎを保ちつつも、『いずれは一人で』という方向性が示されていることで、退寮者の能力がひきだされているのではないだろうか。

3) こころルーム

活動内容:『社会的課題とアート』をテーマに活動。障害のある人やニート、行き場のない人などが『他者と出会う場、素直に話ができる場、表現できる場』の一つとして、カフェやART NPOで相談や就労支援などを実施。

→紹介していただいた2名の概要

(i)50代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」父子家庭。小2から養護施設へ。中3から教護院、少年院、少年刑務所に(万引き・かっぱらい・けんか・恐喝)。父死後、住む家もなくなり、新宿や大阪で日雇い。野宿経験あり。アルコール依存・ギャンブル依存。早朝、たまたま開いていたこころルームに入ったのがきっかけとなり、現在は「よそにいたら酒をのむから」と毎日通ってくる。ボランティア活動に熱中。「主な支援内容」居場所。いきがい。相談。

(ii)40代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」定制高校中退後、大阪で日雇い。野宿経験あり。食事は炊き出し利用。4~5年前から生活保護受給、サポーターハウスに入居するも、引きこもり状態が続く。平成23年夏にたまたま、こころルームの祭に『おもしろそうだな』と思って参加したのがきっかけ。「主な支援内容」食事提供。居場所。相談。

【考察】もともと他者と交流することを得意としない人が釜ヶ崎には多い。本当に独りを好んでいるのではなく、他者と自分との「ちょうどいい距離」が少し遠いだけではないだろうか。支援者・被支援者ではない対等な人間関係を築く上で、「表現」「ART」が大きな役割を果たしている。

4) 紙芝居劇「むすび」

活動内容：釜ヶ崎に居住する生活保護受給者がメンバーとなった紙芝居劇グループである。使用する紙芝居・小道具はすべて自分たちで制作したものであり、物語もオリジナルである。現在固定メンバー7人・マネージャー1人。年間30公演以上をこなす。

→紹介していただいた2人の概要

(i) 90代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」30代で結婚・子ども2人。妻は農業・本人は建設現場で働くも、収入はすべてパチンコに使うのでけんかとなり、釜ヶ崎にきた。日雇いの収入もギャンブルに消える。野宿経験あり。生活保護受給後釜ヶ崎のアパートに入居。家族とは音信不通。「むすび」のメンバーに誘われて参加するようになった。今はギャンブルをしていない。「主な支援内容」初めは、紙芝居のなかで一言いうだけだったが、今は準主役級。服薬支援。居場所。生きがい。

(ii) 80代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」高等小学校卒業後、大阪でサンドイッチマン。ギャンブル・飲酒はしないが、お金をもつとすぐ使ってしまうので、住んでいるサポートティブハウスで金銭管理をしてもらっている。2年前から誘われて「むすび」に参加。「主な支援内容」芸達者である。居場所と生きがい。

【考察】紙芝居を演じることは、メンバー全員の楽しみであるが、他者・社会と関わる場でもある。そこで他者からの評価を得る。「社会の中の自分」に気づき、自己の存在意義を見出し、自尊心が強まるのではないか。

5) のぞみ作業所

活動内容：アルコール依存症患者対象の作業所であり、入院することなく、アルコールを飲まないで人生を豊かに暮らすことができるように支援している。

→紹介していただいた1人の概要

(i) 60代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」中卒後自衛隊入隊。やめてから水道工事会社に勤務するも、仕事がきついと休んで失業し、日雇いに。離婚。子ども4人。野宿経験あり。日雇いになってから飲酒量増加、時には1日にビール大瓶20本。公園で野宿していた時に巡回相談員に『病院にいったらどうや。』と勧められ、『しんどかったし、寒かったし。もう酒やめんならんと思っていた時に勧められた』ので3ヶ月入院。退院時にのぞみ作業所をすすめられた。「主な支援内容」初めは金銭管理。現在は毎日作業所に通ってさをり織などの作業をしている。

【考察】作業所に通いながら、入院することなく、自ら飲酒コントロールした生活がおかれている。相談・金銭管理に加えて「作業すること」「(たとえわずかでも)収入を得る」ことが極めて大きな意味を持っているとい

える。それは、単なる日中の居場所づくりというにとどまらず、責任感や「この仕事は自分にしかできない」「あてにされている」という自尊心にもつながっている。

6) 釜ヶ崎のまち再生フォーラム

活動内容：月1回「定例まちづくりひろば」を開催。すべての住民が共有できる「まちづくりビジョン」を探り、コミュニティビジネスなどの事業化促進で実体化を進める。

→紹介していただいた2人の概要

(i) 70代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」小4の時に家出して東京へ。昭和30年頃釜ヶ崎へ。55歳頃から仕事が少なくなる。相談員にすすめられて生活保護受給し、アパートに入居。再生フォーラムのSさんに会ったのは、70歳過ぎた頃。再生フォーラムの菜園作りに誘われたことからのかわり。「主な支援の内容」入居しているアパートが夜中に火事になり、腰を抜かして動けなくなり、持っていた携帯でSさんに電話。Sさん自身はすぐ駆けつけられないので、現場近くにいる再生フォーラムのメンバーに連絡し、助け出す。その後サポートティブハウスに入居。『だまされたこともあるので人が信じられなくなり、一匹狼だった。Sさんと出会って人間の道を教えてもらった。人間らしくなって信じられるようになった。いまが一番幸せ。』と話す。

(ii) 70代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」大卒後、父親と共に映画館経営。テレビが出てきてダメになり、警備員等をしたのち、60歳から飯場で働く。野宿中に再生フォーラムメンバーに声をかけられ、68歳からサポートティブハウス入居。「主な支援内容」再生フォーラムのメンバーとのつながりの中で、釜ヶ崎ツアーガイドを引き受けている。『何度も自殺を考えた。再生フォーラムのSさんと出会っていなければ、こんなに長生きできなかった。毎日感謝している。』と話す。妻とは離婚。子どもは2人。身内とのつきあいなし。

7) NPO HEALTH SUPPORT OSAKA

活動内容：釜ヶ崎を拠点に、実践的研究・健康支援・生活支援を続けている。

→紹介していただいた2人の概要

(i) 60代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」高卒後、公務員に。結婚・子どもあり。上司とうまくいかず退職後、離婚。職を転々とした後野宿にいた。逢坂らが実施した特掃の健康診査(研究事業)で結核・糖尿病と診断される。「主な支援内容」結核治療開始を勧めるも『ほっといてくれ。死にたいんや。』と頑固に拒否。研究者やボランティアの熱心な説得により治療を開始。アパート入居後生活保護受給。結核治療終了後は、NPO HESOのボランティアとして活躍。

(ii) 60代。「野宿・生活保護受給に至った理由および支援団体につながった経緯」戦災で家消失し生活一変、極貧に。中学もほとんどいけずに卒業後、職を転々とする。うつ病となり、失業。野宿後アルコール依存に。野宿中夜回りに参加していたNPOの医師が血圧測定したのが出会い。「主な支援の内容」夜回りにきた医師が血圧測定し、高血圧（最高血圧240mmHg以上）が判明するも、治療拒否。医師の熱心な叱咤激励に治療開始を承諾。医師に厳しく言われたことへの驚きと、なにか胸がすっきりした思いから、断酒。生活保護受給してアパートに居住後、釜ヶ崎内の子ども施設でボランティア活動。

【釜ヶ崎のまち再生フォーラム・NPO HESOよりの紹介者についての考察】いずれも決して多くの人との交流が得意な人たちではない。上司と合わなかったり、人間不信で一人で生きていこうときめていたり、基本的には友達を作らないなど、人間関係でのつまずきや孤独を抱えていた人たちである。しかし、特定個人とだけであっても、信頼関係を築くことから生き方・考え方を変え、『誰かの役に立つ自分』へと変化している。まさに『人との出会いは人生を変えるチャンス』であることをこれらの事例が示している。

(3) おわりに

釜ヶ崎の支援団体は、今回聞き取り調査をした以外にもまだいくつもあり、7支援団体から紹介していただき聞き取りに応じていただいた人数も15人と限られた数である。聞き取りに協力してくださった支援団体は、それぞれの得意分野で、釜ヶ崎に居住する単身高齢者が抱える多様で深刻な問題に対応するための工夫を重ねながら支援を継続している。極めて多様で、きめの細かい支援が公的サービスを補っている。支援者や支援団体とのかかわりの中で、『人として生きるパワー』『社会とのつながり』をとりもどし、紹介していただいた事例のほとんどが『今が一番幸せ』と答えていた。

しかしながら、今回聞き取りに応じていただいた支援団体と関わりを持つことができていた者の数は、今生活保護を受給してアパートで独り暮らしをしている男性高齢者のほんの一部でしかない。今回の調査結果で明らかのように、行政の直接実施だけでは困難なような多様で独創的な支援活動が展開されている。このような民間支援団体の活動をより活性化するための資金面での公的サポートが緊急に望まれるとともに、行政の支援の中にも取り入れるべきサポートもあると考える。

最後に研究に協力いただいた、支援団体・聞き取りに応じてくださったみなさま、研究に協力くださったみなさまに心よりお礼を申し上げたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

逢坂隆子、ホームレスに対する健康支援に関する実践的研究、ホームレスと社会、査読無、第4号、2011年、32~37

[学会発表] (計14件)

① 逢坂隆子、我が国の健康問題と社会医学の役割～社会経済的な困難生活者・健康課題を有する人々に対する実践的研究～、第54回日本社会医学学会総会シンポジウム、2013年7月、八王子市

② 井戸武實、黒田研二、高鳥毛敏雄、逢坂隆子他、ホームレスの結核対策における専門職の団体活動の意義～西成区あいりん地域の活動から～、第54回日本社会医学学会総会、2013年7月、八王子市

③ 逢坂隆子、社会経済弱者を支える支援組織・団体：釜ヶ崎における実践的研究、第71回日本公衆衛生学会総会シンポジウム、2012年10月、山口市

④ 三浦康代、逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、釜ヶ崎の支援団体から紹介された元野宿者への聞き取り調査～社会的包摂の支援とは～、第71回日本公衆衛生学会総会、2012年10月、山口市

⑤ 逢坂隆子、ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究(その8)～釜ヶ崎における聞き取り調査結果をもとにして～、日本社会福祉学会第60回大会、2012年10月、西宮市

⑥ 逢坂隆子、ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究(その7)～シーケンス分析による質的分析～、日本医療社会福祉学会第22回大会、2012年9月、西宮市

⑦ 鍛冶葉子、嵯峨嘉子、高鳥毛敏雄、黒田研二、逢坂隆子他、ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究(その4)～生活スキル習得に向けた支援のあり方について～、第53回日本社会医学学会総会、2012年7月、高槻市

⑧ 北尾千沙、逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、釜ヶ崎における支援団体の聞き取り調査～サポーターハウスを中心に～、第70回日本公衆衛生学会総会、2011年10月、新潟市

⑨ KAJI YOKO, OHSAKA TAKAKO, The Way of Supporting Improvement in the Self Care Capabilities of Laborers and Welfare Recipients ,ets、第2回日韓地域看護学会共同学術集会、2011年7月、神戸市

⑩ 小椋芳子、逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究(その2)、第

52 回日本社会医学会総会、2011 年 7 月、富山市

⑪ 鍛冶葉子、逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その 3）～釜ヶ崎における被支援者への聞き取り調査から～、第 52 回日本社会医学会総会、2011 年 7 月、富山市

⑫ 大宮陽子、逢坂隆子、高鳥毛敏雄他、釜ヶ崎の単身男性結核患者にみられた「訪問型 DOTS による行動変容」、第 86 回日本結核病学会総会、2011 年 6 月、千代田区

⑬ 逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その 1）、第 69 回日本公衆衛生学会総会、2010 年 10 月、東京都千代田区

⑭ 大宮陽子、逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、釜ヶ崎結核患者の生活実態と課題～訪問型 DOTS 終了者を中心に～、第 51 回日本社会医学会総会、2010 年 7 月、柏原市〔図書〕（計 2 件）

(1) 逢坂隆子編、逢坂他著、『はーとふるⅡ』ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（平成 22・23・24 年度研究報告書）、2013 年 3 月、161 <掲載論文>

① 鍛冶葉子他、紹介していただいた支援団体の概要と、「社会とのつながり」を取り戻した者からの聞き取り、54～83

② 黒田研二、都市貧困高齢者に対する住居と生活の支援—サポーターハウスにおける支援を中心として—、84～93

③ 加美嘉史、生活保護の制度的課題の検討、94～104

④ 高鳥毛敏雄、プライマリーケアセンターを基盤とした結核対策システムの構築—西成特区構想を起点に—、105～111

⑤ 逢坂隆子他、心を動かす働きかけにより社会とのつながりをとりもどした 3 人への聞き取り—シークエンス分析による質的分析—、112～118

⑥ 井戸武實、高田佐土子、大宮陽子、小林由美子、難波邦子、逢坂隆子、釜ヶ崎における結核検診および DOTS、フォロー事業～HESO の活動報告～、119～135

⑦ 梅田道子、「ともにある」ということ、136～144

⑧ 逢坂隆子、高鳥毛敏雄、黒田研二他、大阪市高齢者特別清掃事業従事者の健康・生活調査によって生じたホームレス者の変容—エスノグラフィー分析を用いた再分析、145～161

(2) 逢坂隆子他編著、『はーとふる』釜ヶ崎における支援団体活動ききとり調査報告書、2011 年 3 月、103〔その他〕

NPO ヘルスサポート大阪のホームページを利用して研究成果を公表

6. 研究組織

(1) 研究代表者

逢坂 隆子 (OHSAKA TAKAKO)
四天王寺大学・人文社会学部・教授
研究者番号：50028544

(2) 研究分担者

高鳥毛 敏雄 (TAKATORIGE TOSHIO)
関西大学・社会安全学部・教授
研究者番号：20206775

中田 信昭 (NAKATA NOBUAKI)

大阪市立大学・大学院医学研究科・講師
研究者番号：00207804

嵯峨 嘉子 (SAGA YOSHIKO)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：30340938

(3) 連携研究者

黒田 研二 (KURODA KENJI)
関西大学・人間健康学部・教授

研究者番号：70144491

加美 嘉史 (KAMI YOSHIHUMI)

佛教大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：20340474

福原 宏幸 (HUKUHARA HIROYUKI)

大阪市立大学・経済学研究科・教授
研究者番号：20202286

(4) 共同研究者

井戸武實・山本繁・大宮陽子・小林由美子・難波邦子・高田佐土子・小椋芳子・松田光恵（以上 NPO HEALTH SUPPORT OSAKA）、梅田道子（NPO HEALTH SUPPORT HINATA）、鍛冶葉子（甲南女子大学）、三浦康代（明治国際医療大学）、北尾千沙（白鳳女子短期大学）、村岡茉莉子（大阪府立大学）、その他調査に協力いただいた支援団体や被支援者の皆様